津市指定史跡　池の谷古墳

池の谷古墳は、伊勢湾を一望できる標高約50メートルの垂水の丘陵上に築造された津市最大の前方後円墳です。前方後円墳という古墳の墳形は、大和王権のなかで最も格式の高い古墳

の形であり、前方後円墳の広がりは、大和王権の地方への拡大を示したものと考えられています。池の谷古墳の全長は約90メートルと伊勢湾西岸でも有数の規模を誇ります。

しかし、中世に砦（とりで）とされたため後円部には堀が巡り、また前方部先端は一部消滅しています。過去2回の部分的な調査で、円筒埴輪の破片が出土しており、その特徴から4世紀の末ごろに造られたものと考えられています。

池の谷古墳の南ろくを流れる相川は、古墳の１キロメートルほど下流で高茶屋台地から流れてくる天神川と合流して伊勢湾に注いでいます。

相川と天神川の合流点に近い藤方が、古くは「藤潟」と記されたこと、今でも相川と天神川の河口付近が海抜０メートルの低湿地であることなどから、かつて藤方付近には潟湖が形成されていたと考えられています。潟湖（せきこ）は天橋立（京都府）のような砂嘴（さし）によって、外海と分離された入江で、天然の良港といわれており、潟湖を見下ろす丘陵上に古墳が築かれている例は多く見られます。

池の谷古墳周辺には、古墳の造営の基盤となるような弥生時代から古墳時代の遺跡が多く存在します。池の谷古墳よりは少し時期的には下がるのですが、高茶屋大垣内遺跡からは６世紀前半ごろの土器焼成坑（どきしょうせいこう）が発見され、「日本書紀」雄略（ゆうりゃく）天皇の17年３月の条にある「伊勢国藤形村」から朝廷に献じられた土師器工人（はじきこうじん）の記述との関連が注目されます。

（「広報津」平成19年５月１日号）

垂水丘陵の端部に築かれた池の谷古墳（写真中央）